The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	正徹の定家受容 : その幽玄論の定立をめぐって
Author(s)	横山, 正
Citation	語文. 1955, 15, p. 23-32
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68481
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

正徹の定家受容

――その幽玄論の定立めぐつて――

藥師寺寿彦

「抑於二歌道一定家を難ぜん輩は、冥加もあらず、罰をかうぶるべき事なり。（徹書記物語）」とする正徹にとつて、定家はまさに天上に君臨する絶対者とでも云うべきものであつた。また彼は歌を三首示され何れをとるかと尋ねられた時、「我は定家宗にてはつべき上は」と、ためらう事なく定家の歌をとつたと東野州聞書は伝えている。このように彼の定家に対する態度は、宗教的な帰依とでも云うべきものであつた。

中世の和歌史を通じて、定家の一統が歌壇を壟断するや、定家崇拝は勿論何れの流派にも共通した現象であつた。しかしその受容の仕方は各派それ〴〵一様でなかつた。

私はそのような正徹が定家をどのように受取り、またそれをどのように彼自身の文学に生かしているかを考察し、彼の文学を定位する前提とすると共に、文学現象としての「影響」というものを解明する第一歩としたいと思う。

一

まず正徹は定家のどのような書物をよんでいたかを明かにしておく必要がある。

拾遺愚草

彼が拾遺愚草を熟読していたらしいことは、天理大学附属図書館所蔵佐々木文庫中に伝正徹筆の同書が存し（註一）、又「藤原定家歌集」（岩波文庫）の底本には正徹の奥書がみられ、図書寮には正徹・正広が証本としたという奥書のある写本が所蔵されている（註二）ことによつても推察出来る。

詠歌大概

定家の書に歌に師なし。いにしてをもつて師とす云々。（以下イ本アリ、心を古風に染て、詞を先達にならはる。たれかうたをよまざらむと云々。）（徹書記物語）

これは詠歌大概の「和歌無二師匠一。唯以二旧歌一為レ師。染二心於古風一習二詞於先達一者、誰人不一詠レ之哉。」の個所を受けていると考えられる。

毎月抄

毎月御百首の書は、定家のかまくらの右府のかたへ進ぜられし抄なり。重宝なり。此やうにやす〴〵と別したることもなきものが、重宝にてはあるなり。（中略）これを毎月抄と申す也。（徹書記物語）

近代秀歌

つらゆきも、ものづよき歌のほどはよみ侍りしが幽玄抜群のほどをばよまずと定家書きたまへり。（徹書記物語）

これは近代秀歌の「むかし貫之歌、心たくみに、たけ及びがたく、こと葉つよくすがたおもしろき様をこのみて、余情妖艶の躰をよまず。」を受けて言つている。

これ等は正徹が読んでいた事をはつきり示しているものである。その他秀歌体大略などの秀歌例を示したものや、井蛙抄に伝える定家の書簡、定家十体、定家の判詞のある歌合などについては読んでいたか否かを明かにし難い。

さらに徹書記物語に、定家の住吉参籠の事を述べ「此事などをかきのせたるる明月記と号するなり。」とあり、石田吉貞氏はこの個所を定家真作の歌論書明月記を想定される一つの根拠とされた（註三）。しかし果してそうであるか、又正徹が実際にそれを読んでいたか、それとも単に毎月抄の記述に拠つただけであるのか、今にわかに決定し難い。

以上の外に正徹は、今日定家に仮託した偽書と考えられているものを読んでいた事が明かである。

愚秘抄・愚見抄

石田氏は前掲の論文に於て、この両書を正徹が援用しているのを指摘されている。

桐火桶

俊成はいつもすゝけたる浄依のかみばかりうちかきて、桐火桶にうちかゝりて案じ給ひしなり。（徹書記物語）

という個所は桐火桶によつたと思われる。

未来記

歌に秀句が大事也。定家の未来記、秀句の事をいひたる也。（清巌茶話）

によつて、当時冷泉派に於てどのような形で伝えられていたかは別として、とにかく秀句例を示したものとして彼は未来記をみていた事がわかる。

三五記

さらに注目すべきは、天理大学附属図書館佐々木文庫中に「正徹奥書本三五記」が存する事である（註四）。この奥書によつて、正徹はこの三五記を定家の真作と信んじていさゝかの疑問をも持たなかつたというのではないが、あるいは「家説及レ見処」と記し、あるいは為邦所持の同書を少年の昔見た事にふれて、「若然者定家卿作歟」と記しているのによれば定家作説に傾斜していると見る事が出来る。こうした態度は、三五記だけに限られているのか、それとも他の偽書にも通じているのかは明確にし難いが正徹がしば〳〵偽書の援用を試みている事と、東野州聞書で伝える如く当時の二条派がそれ等を偽書としている事とを思い合せば、他の偽書に対しても似たような見解を持つていたのではなかろうか。

とにかく正徹は、定家の著作の多くをよんでいたが、今日偽書とされているものを、全然疑いを持たなかつたのではないとしても、定家の所説をよみ取り得るものとしてそれ等をよみ、またしば〳〵援用を試みている点に注目しなければならない。

註一、竹柏園蔵書誌参照。

註二、図書寮典籍解題文学編参照。

註三、「定家偽書発生の径路」（国語と国文学二八巻一二号）

註四、すでに田中裕先生が「定家仮託書の批判」（国語国文二二巻一〇号）に奥書の全文を紹介された。

二

正徹の定家受容の仕方を考えるについて、はじめに作品自体をどのように理解していたかを考えてみよう。

「恋歌には、定家の歌ほどなるはむかしよりあるまじきなり。（徹書記物語）」というような言葉が彼の論書にしば〳〵見られ、それ等は彼が、恋の歌人として定家に傾倒していた事を示している。そして定家の恋歌について彼は、

作者の歌は、詞の外に面かげがそひて、何となくうち詠てあはれに覚ゆる也。六百番に、寄猪恋

うちやまずふすゐの床はやすくともなげくもかたみねぬも契を心は終日恋ひ悲しびてなげくもひとのかたみ、よるは終日ねもせで心を尽すも、よゝの契りなれば、わが臥猪のやすくゐるもうらやましからずと也。哀なる心也。（清巌茶話）

と云っている。即ち余情としてあはれな情調が脈打っているが故にこよなく賞したのであり、またそのようなものとして彼は定家の恋歌を理解していたのである。

そしてこのような理解の仕方は恋の歌に止まらなかったと思われる。定家が母を失った時の歌「玉ゆらの露もなみだもとゞまらずなき人こふる宿の秋かぜ」をあげて清巌茶話の中で、「哀れさも、かなしさも、いふかぎりなく、もみにもうだる歌ざま也。」と評している。こゝに「もみにもうだる歌ざま」と、その情調の深さを、心の深所で人々の魂をえぐり出すようなものとして理解鑑賞している所に注意すべきである。（勿論屈折した表現手法の面もさしてはいるが）

このような理解の上に立つて、「ねざめなどに定家の歌を思ひ出しぬれば、物ぐるひになる心地し侍る也。（以下イ本アリ）だふる躰をよみ侍る事、定家の歌ほどなる事はなき也）（清巌茶話）」というような言葉が出て来たと考えられる。身もだえするような心情が表現されていると考えるのである。それは勿論直線的なものでなく、複雑な心情、情調を表わすに適した屈折した表現によって、なされていると考えているのは云うまでもない。「定家々集を御覧さふらへ、たゞまひらなる歌はさらになき也。（徹書記物語）」という言葉がこれを示している。

要するに、複雑な心象をそれに応じた屈折した表現によってあらわし、さらに人々の心をもえぐり出すような心情を余情として蔵している歌―そして恋の歌にその特色が集約的に現わされている―を作る歌人として正徹は定家を理解していたと思われるのである。

三

さて以上のような歌人として、定家を理解していた正徹は、彼の歌論の中にどのように定家を受入れたか。それを考える前に、まず彼の歌論の中核をなしている幽玄について考察してみよう。

「かやうに行雲廻雪の体とて雪の風にふかれゆきたる体、花に霞のたなびきたる体は、なにとなく（面白く）（イ本アリ）艶なる物なり。飄白としてなにともいはれぬ所のあるが、無上のうたにて侍るなり。眉目うつくしき人（女イ）の、物おもひゐたるに、歌をばたとへたる物なり。ものをいはねどもさすがに物おもひゐたる気色は、可レ知（しるきイ）なり。また

をさな子の二つ三つなるが、物をもちて、人にこれ〳〵といひたる心ざしはあれども、さだかにいひやらぬにもたとへたり。さればいひのこしたる体なるがうたはよきなり。（徹書記物語）」と彼は云つている。幽玄とは何よりも余情のある事が必須条件である。余情としてのあるかなきかの情感が、縹渺としてたゞよう所に幽玄があつた。こゝにはすでに風巻氏が指摘されているように無名抄の叙述と類似している個所もあるが、花に霞がたなびくという愚秘抄または三五記を受けた譬喩（註二）は、勿論美的内容にもかゝわつているが、またその姿がそうであつたとしていると考えられる。まさに物象を名指してこれ〳〵と云つてしまわない表現—象徴的表現（註三）そこに幽玄体があり得たのである。

またそのような表現によつてもたらされた情美は、「幽玄体の事、正しくその位にのりゐて納得すべき事にや。人のおほく幽玄なる事よと云ふをきけば、たゞ余情の体にて、さらに幽玄にはあらず。あるはものあはれなる体などを、幽玄と申すなり。心得べし。つらゆきも、ものづよき歌のほどは、よみ侍りしが、幽玄抜群のほどをばよまずと定家書きたまへり。（徹書記物語）」と述べているように余情があるだけでは幽玄に価しないのであり、またその情美が単に「物哀れ」なものであつても、それだけでは幽玄ではなかつたのである。そしてこゝで注意すべきは、すでに指摘されているように（註四）、定家が近代秀歌で「余情妖艶」と云つたのを、「幽玄抜群」と置きかえた事である。おそらく記憶をたどつて無意識の裡にこのようにモディファイしてしまつたのであろうが、要するに正徹の幽玄は、彼の理解した意味に於ては、妖艶と同意義であつた。ただ正徹が妖艶という語をどのように考えていたかを知る事が出来ないため、これ以上厳密に追求する事が出来ない。

さらに彼は、「月にうすぐものおほひ、花に霞のかゝりたる風情は、詞心にとかくいふ所にあらず。幽玄にもやさしくもあるは、ことの外なる也。（徹書記物語）」と云つている。それは「ものづよき」とか、「ふとくたくましき」とか云つた方向ではなく、いわば「やさしさ」の方向にあつたのである。

「南殿の花盛りに咲きみだれたるを、絹袴着たる女房四五人ながめたらん風情を幽玄体といふべきか。（清巌茶話）」という譬喩をみれば、そこにはむしろ華麗さに近いものが考えられる。それはむせぶような唯美の世界ではあるが、決して満月が照り渡るようなあでやかな又はなやそのまゝの世界ではなかつた。「月に薄雲のおほひたるや、山の紅葉に秋の霧のかゝれる風情を幽玄の姿とする也。これはいづこが幽玄ぞといふにも、いづくといひがたき也。それを心得ぬ人は（月は）（イ本アリ）きら〳〵と晴れてあ（青きイ）まねき空にあるこそおもしろけれともいはむ（は）（イ本アリ）道理なり。（清巌茶話）」と彼は云つている。雲や霧におゝわれしつとりとぬれいぶされた景情によつて形成される一種うちしおれた世界（註五）であつた。

このような意味に於て、正徹の幽玄は単なる華麗な美そのものでなく、いわばそれをしおつたものであり、古典的情美そのまゝでなく、一ひねりひねつた時代的な契機を蔵しているのを見逃してはならない。

以上のような景情によつて表象される幽玄は、人間的世界に於ては、みめうるわしき人の物おもいにふけつている世界—恋の世界であつた。それは彼が幽玄と評した作品を見る事によつて明らかで、彼は先人の作品としては、

白妙のそでのわかれに露落ちて身にしむ色の秋風ぞふく（定家）
いきてよもあすまで人はつらからじ此の夕暮をとはばとへかし（式子内親王）
あはれなる心ながさの行衛とも見し夜の夢を誰か定めむ（俊成卿女）
聞くやいかにうはの空なる風だにもまつに音するならひありとは（宮内卿）
みてもまたあふよ稀なる夢のうちにやがてまぎるゝうき身ともがな（源氏物語）

などの歌八首を挙げているがすべて恋の歌で占められている。身もだえする苦しみが唯美化され永遠化され、夢幻的な世界となり、身も心もそゞろ吸いこまれて行く物狂おしいまでの陶酔境である。

また彼自身の作で幽玄としているのは二首で、「さけばちる夜の間の花の夢の中にやがてまぎれぬ峯の白雲」の歌は前掲の源氏物語の歌を本歌としてふまえたものであり、源氏物語という王朝的な古典的な契機が導入されると共に、複雑な景情にはかない恋の心がとかしこまれている。「夕まぐれそれかと見えし面影のかすむぞかたみ有明の月」という作品も俊成卿女の歌「おもかげの霞める月ぞやどりける春や昔の袖の涙に（新古今）」をふまえているようで、同様に恋の心であり、夢幻的な晦渋な作品と云えよう。

しかし彼にとってこうした幽玄の世界がすべてではなかった。彼は作品に自註を附して、「風情珍し」「珍し」「新し」「面白し」といった言葉を用いている「さゝめごと」に伝える如く、「人に云ひ合はせじ」とする彼の作品は、新造句や新題を創始する等、新しさ珍らしさを極力追求する一種の新奇主義・珍奇主義的な傾向を持つと共に、乱暴とさえ思われる大胆な掛詞縁語などの技法を用いた措辞によって面白さをねらった作品が数多く存することも注目しなければならない（註六）。つまり彼は単に幽玄だけの歌人ともいえないのであるが、しかし所詮その幽玄は古典的モメントを充分に持込み、それによって新しさ珍しさをめざす力をセーヴし屈折させた所に生れた世界であった。

以上要するに正徹の幽玄は、縹渺たる表現によって余情として「やさしさ」の方向にその美を表出したものであって、それは華麗さを打ちしおった「月にうす雲がたなびき」「花に霞のかゝった」景情によって表象されるものであって、人間的世界に於ては、恋にもだえくるしむ心情が夢幻的に唯美化され昇華されたものであった。そして彼の幽玄はその新奇主義珍奇主義が王朝的世界の憧憬によって、いわばセーヴされた所に成立っていた。

註一、前掲論文
註二、後掲の愚秘抄・三五記の引用参照。
註三、すでに岡崎義恵博士によって彼の作品が象徴的傾向を持つ事が指摘された。（「日本文芸学」所収「正徹の風体」）
註四、久松潜一博士「日本文学評論史」古代中世編・第二編第二章など。
註五、彼は徒然草の「花はさかりに月は云々」の条をあげて兼好を激賞している。兼好の美意識に相通ずるものがあったわけであり、そこに時代的な契機を見る事が出来る。
註六、斎藤清衛博士「草根集の考察」（国語と国文学九巻一〇号）参照。

四

以上のような彼の幽玄論は、定家をどのように受継いだのであろうか。それは定家の幽玄の概念と対比させる事によつて明かにする事が出来る。そうした意味で、まず第一項で挙げた書目中、信証性のある諸書を中心に定家の云う幽玄について考える必要があるが、この点についてはすでに谷山茂氏や能勢朝次博士のすぐれた論考（註一）が存するので必要最少限度にとゞめておく。

定家に於て「幽玄様」は有心体・事可然様・麗様と共に「もとの姿」即ち基本的歌体であつた（毎月抄）。

そして近代秀歌遣送本の俊頼の歌に附された註「是は幽玄に、おもかげかすかに、さびしきやうなり。」によれば、心象の細み、かすかさ、さびしさは、幽玄そのものの属性を表わしているか否かは断じ得ないとしても、少くともそうしたものは幽玄と美の基本的方向に於て矛盾対立するものではないと考えられる。

所が歌合に於て定家が幽玄と評した五首の歌は何れも自然または述懐を詠じた作品であつて（恋歌的な色彩は全くみられない）、そこには「深奥静寂」なもの（谷山氏）、「寂寥の余情」（能勢博士）が感得出来る。

とすれば定家の幽玄には、そうした情調がそれに固有のものとして存在すると考えられる。

それは正徹の云う幽玄とは、「おもかげかすか」という点では相反する事はないとしても、表象構成された美世界のその方向に於て、一方は一抹のさびしさ—人間の愛欲的な世界にかゝわらないからびたものであり、他方は、やさしさ—その底に愛欲的世界を秘めたうちかすむ世界であつて、相関わるものではない。

正徹はたしかに近代秀歌をよんでいたし、またそれを受入れようとしていたにちがいない。しかし彼は前述の如く定家の幽玄を妖艶と解したのであり、いわば著しく自己に引入れるよみ方で定家歌書をよみ取つたのである。そのような意味で、正徹はその主観的意図に於てどうであろうとも、結果的には定家自身の幽玄を受入れたことにはならなかつた。

しかし正徹の時代にはもう一人の定家即ち偽書群によつて構成されている定家が存在した。即ち次に正徹は、前掲書目中の仮託書の幽玄からどのように影響を受けているかを考えなければならない。

愚秘抄を見ると、幽玄を行雲・廻雪に分けて、文選の高唐賦を引用すると共に、

(1)やさしくけだかくして、薄雲の月を帯びたらん心ちせん歌を行雲と申べし。又やさしく気色ばみてたゞならぬが、しかもこまかに飛雪の、いたくつよからぬ風にまよひちる心ちせん歌を、廻雪とは申侍べきにや。

と云つている。説明的な平板な叙述であるが要するに、薄雲が月を帯びた様子とか、飛雪が風にまよい散るとか云う譬喩は、その縹渺として不分明な、それでいてその内部に一種の情調をふんわりと漂わせている歌体であるとするのであろう。そしてその情調は「やさしくけだかい」ものであり、また「やさしく気色ばんだ」ものであるとしている、即ちその美的方向として「やさしさ」を持つていたのである。

また桐火桶には俊成が語つたとして、

(2)たゞ人門幽玄にやさしからむと思ひて、しかもたゞしくよみ習

ふべし。

とあるが、幽玄とやさしが並列されている所からすれば、両者はシノニムではないが、幽玄は「やさし」に似通つた美的方向を持つている事がよみとれる。

さらに三五記をみれば、

(3)所詮幽玄といはるゝ歌の中に、なほ勝れて、薄雲の月をおほひたるよそほひ、飛雪の風に漂ふけしきの心地して、心詞の外にかげのうかびそへたらむ歌を、行雲廻雪の体と申すべきとぞ亡父卿申されし。先づ何れの姿と申しながら、是こそ和歌のほんいなれとて、初心の時しめし給し体なり。されば歌には、やさしく物柔かなるすぢを冀ふべき事とやらむ。

とある。こゝに心詞の外に「かげ」がうかぶ事、即ち余情が強調され、その余情美は、「やさしさ」を志向していることが自明の事として承認されているのを読みとる事が出来る。この点では、すべての仮託書が完全に一致しているわけである。（愚見抄に於ても同然）

またさらにこの(3)では、(1)と同じく行雲廻雲に分けられ渺茫としてたゞよう情趣美であり、また(1)の高唐賦の引用によつてわかるように、はかない恋の境地として規定されているように思われる。そしてこのような境地は(2)(3)によれば、初心の時に学ぶべきだとされ、また(3)に於ては「これこそ和歌のほんいなれ」と俊成が語つたという形で相当に強調（注二）されていながらも、これらの説明的な平板な叙述からは、それをさゝえている力強い主体の存在を推知し難い。そして偽書相互間の論旨はまさに矛盾対立しないという程度に於て一致しているのだと云わなければならない。

これをさらに例歌によつてみれば、三五記に幽玄として挙げた九首（註三）のうち、勅撰集で恋の部類に入らないのは「風吹けばよそになるみのかたおもひ思はぬ浪になく千鳥かな」（秀能・新古今集・冬）の一首だけであり、これも恋の情調をふまえた作品である（註四）。

そしてそれは定家自身が幽玄とする歌に、恋の色調を帯びたものが一首も存在しないのと明瞭に対比される（註五）。

以上要するに偽書群の幽玄は、茫漠とした表現の中に余情として「やさし」の方向にある情調をふんわりとつゝんだものであり、恋・述懐的な抒情を下にふまえたものだと考えられる。そしてそのような情調は、定家自身が考えた幽玄とその美の基本的方向などから考えて同一方向にあるものではなく、また定家自身が考えた以上に強調されていると思われる。

註一、「幽玄の研究」「幽玄論」

註二、毎月抄では「もとの姿」とことさら価値的な意味あいをこめずに云われているが、この「ほんい」という語には、価値的な意味あいがこめられている。また定家十体の例歌は五十八首と最高を示しているのも偶然とは云い難い。

註三、群書類従本には八首しかないが、正徹奥書本などには九首あり、類従本は一首脱したと思われる。

なおこの九首はことごとく定家十体にもあり、両書の関係の密接さを示している。例歌五十八首のうち勅撰集に於て恋の部類に入つているものは二二首、他に哀傷・雑・別離などで述懐的な傾向を持つものが計一二首、秋六首春五首等となつている。

註四、新古今時代に於て、恋歌と叙景歌などとは劃然と区別しがたく、混然としていた事が小島吉雄博士の「新古今集の研究続編」に指摘されている。

註五、近代秀歌で幽玄と評された「うづらなく」の歌は、三五記・定家十体ともに麗体に所属させ（後鳥羽院御口伝でも「うるはし」とし、桐火桶一本では「景気」とする）定家の幽玄は偽書群のいう麗体に近かつたようである。

また近代秀歌で「心深し」とされた「うかりける」の歌は二書とも面白体とし、後鳥羽院御口伝では「もみ〳〵と人はえよみおほせぬやうなる姿」として、定家の庶幾する姿としている。これらからして仮託書群はすくなくとも十体概念に関する限り信じ得ない。

五

以上の叙述によつて仮託書の幽玄と正徹のそれとの間には、外形的な近しさが感ぜられる事は云うまでもない。従つて正徹は定家の仮託書の影響を受けてその幽玄論をうちたて、両者はほゞ同様の概念であつたと云つて誤りではない。しかし美的範疇に於て同一であるが故に詩精神に於ても同質であると断ずる事は出来ない。そのような意味でこうした「影響」というような言葉で規定しそれ以上の追求を行わなかつたり、また様式といつた類型概念でひつくるめてしまうのは危険である。

事実仮託書の幽玄は、その外形的な輪廓はかなりはつきりとしているようでありながら、その中核或は生命的なものを明確に推知しがたいのは、詩精神の裏づけが欠除しているためではなかろうか。そして正徹はそのような仮託書の幽玄から所謂「影響」を受けて、それに解釈を与え、詩精神の裏づけによつて生命力を賦与したのだと云える。そのような意味で多くのもの、本質的なものをつけ加えているのである。

そのつけ加えたものはと云えば、先に記した歌人としての定家に対する理解内容を思いおこせばよいであろう。前述の如く彼は定家を、もだえる恋の情感と錯雑した心象とを、屈折した表現によつてあらわし、読む者の魂をゆりうごかす歌人として理解していたのである。そしてこのような正徹の理解した定家は、決して定家の全面ではなく、新古今の撰進に至る前半世の定家を局面的に摘出したものと云えよう。即ち正徹は直接には似而非定家たる仮託書の幽玄に多く学びながらも、こうした唯美精神を吹込むことによつて、本物の定家の一面に近づき、彼の歌論の中核をなす幽玄論を形成し得たと考えられる。

かゝる事が可能となつたその基底には正徹の定家に対する強い共感の必然性が考えられねばならない。このような共感の必然性は、巨視的な視点から見た場合、どこにあるのであろうか。

さきにあの正徹の熱つぽい定家理解をさゝえていたものとして、従つて彼の幽玄論形成の重要なモメントとして、古典趣味とも云うべき王朝美への憧憬が作用しているのを指摘しておいた。すでに現実に存しないものに憧れていたわけである。この点今詳細に述べる余裕がないが、新古今撰進に至る時代の定家も、同様に王朝美に対する熱烈な信者であり、徹底した芸術至上主義者であつた。

しかし定家に於ては、それは現実に存在する基盤を全く喪失した時代ではなかつた。影がうすくなつたとは云え、まだどこかに余映

を残していた時代である。そしてそれが失われようとする時、その残映に死物狂いでしがみついていたわけである。こゝに両者の根本的な差異を認める事が出来る。

定家は、現実から目をそらして彼自身明確に意識しなかつたとは云え、亡びゆく貴族の一員であり、すべての生活基盤も亦そのような所に持つていた。そして当時の宮廷貴族がすべてそうであつたように、一歩もその埒外に出ようとはしなかつたのである。目前に与えられた文学としての和歌の世界にあつて、特に前半世はひたすらその中に没入し、唯美の殿堂を築こうとしたのである。彼自身決して停滞やたゞ徒らな完成度の高さだけを求めたのではないが、もはや和歌文学の大詰にまで来ていた当時、彼の努力もそれに飛躍的な発展をもたらすという事は全く不可能であつた。

いわば古代的な貴族詩としての和歌ジャンルの発展的終局に位置していた当時として、その中でのあたうる限りの努力が、彼独特の方法によつて、景情に新しい秩序を与え、象徴的手法によつて、王朝的な夢幻的な美の世界を構成した作品となつたのである。

一方正徹はその生活に於て、世を時めく武士的世界に意識的につながりを求めていた(註一)。そのような彼にとつて王朝美追慕は、美麗な夢を築きあげる契機としての意味しか持たなかつた。彼は新古今集以来次第に下向線をたどり、もはや使い古されマンネリズムに落入つていた和歌ジャンルにあくまでも固執し(註二)、ぎり〳〵にその極限を追求して行つた。つまり和歌ジャンルの中で、その果てを追求するというみじめな努力を試みたと云えよう。そしてその努力は、彼の求めた独特の幽玄美となり、また晦渋きわまる構成主義的な一群の作品となり、また新造句や縁語掛詞などを多用して面白さと珍奇さとを求めた一群の作品系列となつて現われたのである。

以上のような両者の交錯する地点に、正徹をして定家に共鳴させた必然性が存し、そこに共感が流れていたと云えよう。それは一言で云えば、和歌ジャンルの中での極限追求のあくなき努力と、手法として象徴主義的な方向をとつた事に対する共感である。

しかしながら前述のように、本来異つた場所での極限追求であるため、現象的には共通していると思われる王朝的な夢幻の世界も、定家にあつてはその中に身をおよがせながら求めた世界であり、正徹にあつては、古典的情美追求の契機として、氷結し眺めた世界であつた。(しかも彼はその古典的情美を時代的な打ちしおつたものに変容したのである)

正徹は「其風をまなぶとも、てにをは詞をにせ侍るは、かたはらいたき事也。いかにも其風(イ本アリ)(骨)心づかひをまなぶべき也。(徹書記物語)と云つている。彼が云う如く風骨を来びとる事によつて成立つ影響(これが本当の意味での文学現象としての影響であろう)には、共感をさゝえる共通の基盤が予想される。それは正徹にとつては、極限追求の努力を中核にしたものであつた。

しかしまた文学享受の必然として、被影響者の影響者理解は、影響者の文学を被影響者のもの—いわば自己の背丈にあうもの—として受取るのである。正徹の理解した定家は実は定家の半面であり、また彼の歌論の中核をなす幽玄は、実は直接には偽書を契機としたものであり、作品解釈にさゝえられて自己を投入する事によつて成立つたのである。

またそうした自己投入によつてこそ、正徹は、定家の悪しき意味

でのエピゴーネンたる事から救われたのである。

註一、彼は備中小田の地頭職紀氏小松康清の子として生れた。藤原隆景氏「正徹年譜」(国語と国文学八巻七号)「招月庵正徹論」(吉備文化三号)。また辻善之助博士は「日本文化史」巻四第三七章に於て、当時の多くの大名が正徹と文学上の交りを結んだ事を指摘されている。逆に云えば、正徹は多くの上層武士との交りを求めていたとも考えられる。

註二、たとえば「なぐさめ草」の中で、連歌は老後のなぐさめ程度のものだとしている等、彼はひたすら和歌に打込んでいたようである。

――大阪大学大学院学生――